SOGETSU IN BRASILIA

Overseas Branches and Study Groups

草月とともに歩みながら変革を重ねる

昨年12月、日本から遙か離れたブラジルのブラジリアに、海外支部が誕生しました。黎明期よりブラジリアにおける草月の活動を牽引し続ける支部長のジラ・ダ・コスタ・ハイムンドさんに、ご自身の活動とともに語っていただきました。

草月　世界の街へ⑰

ブラジル　ブラジリア支部

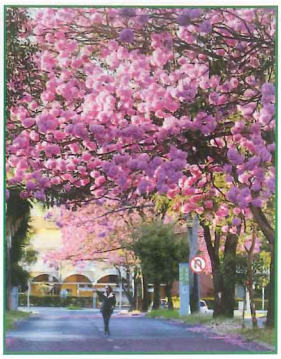
ジラ・ダ・コスタ・ハイムンド

Zilá da Costa Raymundo

広大な国土に季節の花々が咲く

リオデジャネイロオリンピックの熱気も記憶に新しいブラジル。ブラジリアは今から58年前の1960年、ブラジルの首都として未開の土地に建設された計画都市です。ブラジルの人口約2億700万人のうち300万人ほどが、ここブラジリアに居住しています。

ブラジルの国土は広大なため、地域によって気候も異なりますが、大部分が年間平均気温20度以上の熱帯地域に属します。ブラジリアには雨季と乾季があり、もっとも乾燥する時期には湿度が17%をきることも。見渡す限りの芝生はすっかり枯れ、樹木も落葉してしまいます。その代わり、〝セラード（サバンナ）〟と呼ばれる地で生育する木が、時期を追うごとに様々な色の美しい花を咲かせるのです。これからの季節なら、6月にはピンクと紫の、7月には黄色の、8月には白い花が順に咲き、人々を魅了します。



ブラジリアの典型的な花〝イペー〟。
"Ipe" the typical flower of Brasilia region.
PHOTO : Ed Alves

ブラジリアはプラナルトと呼ばれる高原地帯にあるため、乾季の空は青く澄み渡り、ブラジルでもっとも美しい夕焼けを見ることができます。このようにたいへん美しい自然と花に恵まれたブラジリアで、草月がどのように発展を遂げていったのか、私といけばなとの関わりを絡めつつ、お話ししたいと思います。

私はブラジル南部にある、サンタ・クルズ・ド・スルという小さな町で生まれ育ち、結婚を機にブラジリアに居を構えました。自分で育てた花を花瓶にいけて飾る喜びを教えてくれたのは母です。幼いころから「飾り立てる必要はないの。大事なのはいつもお家を小ぎれいにしておくこと、そして花瓶に新鮮な花をいけておくことよ」と、よく聞かされたものでした。そのためブラジリアに家を建てたときは家具を少なくし、そのぶん大きな庭を作って、家中を花でいっぱいにしたほどです。

最初に師事したジゼラさん（右）と。
With Gisela-san, her first Ikebana teacher (right).

いけばなとの出合いは忘れもしません、1985年の中ごろのことでした。絵画展を訪れた際に、絵画に混じって、いけばなが置かれていたのです。それは、アンスリウムと緑色の大きな葉が黒い水盤に浮いているような美しい作品でした。ひと目観た瞬間に、私はいけばなの虜になったのです。

すぐにこの作品の作者であるジゼラ先生のクラスに申しこみ、稽古を開始。当初は絵画展で観た作品のように水盤に花を固定する方法さえわかれば十分、と思っていましたが、まずはじめに先生が花の位置や角度を示す花型を黒板に書いたのを見て、いけばなの奥深さに衝撃を受けました。そこで、もっともっと極めてみたいと、関連書籍を探し求めて図書館に行った際、唯一見つけたいけばなに関する本こそが、霞家元の著書『KASUMI'S IKEBANA FOR ALL SEASONS』だったのです。

それを境に、図書館に出かけては、日本文化や禅、花などに関する本を読み漁る日々が続き、宏家元、竹中麗湖さん、川名哲紀さん、ノーマン・スパノンさん、ステラ・コーさんによって書かれた本にも大きな影響を受けました。はじめは指導者になることなど微塵も考えてはいませんでしたが、いけばなとの運命的な出合いを果たした1年後には、先生の授業や制作の助手をするようになっていたのです。

ブラジルの日本大使館にて大作を展示。
Displayed a large work at the Japanese Embassy in Brazil.

その後、初代の蒼風家元の教えを伝授してくださった、サン

創立70周年記念式典にて、宏家元、当時副会長だった茜家元と。
At the Sogetsu 70th anniversary ceremony, with Iemoto Hiroshi and Iemoto Akane, Vice Chairman at that time.

パウロ支部のマリア・エツコ・フジモト先生の推薦により、私は指導者としての道を歩み始めることになりました。4人の生徒からのスタートでしたが徐々に増え、2000年代はじめにかけては1週間で6クラスにまで膨らんだことも。現在はペースを抑え、週に2回、約20名ほどの生徒に教えています。

各クラスをあえて8〜10名の少人数制にし、生徒たちが何か新しいものに出合えるようにと、工夫をこらしています。例えば花型の説明に加えて、歴代家元の教えや日本の芸術・文化に関連した事柄なども織り交ぜながら、楽しく話をするようにしています。そして、ティーブレイクを挟んで、花材を選んでいけ、完成した作品に私が手直しを加える、といった具合に進んでいきます。

生徒は友人の紹介で来た人、展覧会やインターネットをみて来た人、日本大使館からの人、ブラジル人だけでなく外国人も多く、動機も人種もさまざま。クラスはさながら異文化交流の場にもなっています。

徐々に高ぶる支部設立への思い

このような和気藹々とした稽古を通じて、どんどん有能な生徒が育っていきました。そういった背景のもと、まずは1994年に3人の講師とブラジリアの生徒で構成される「いけばなブラジリアクラブ」を設立。一般の方に向けて展覧会やワークショップなど、数々のイベントを地道に行った甲斐があり、会員数は年を追うごとに増加していきました。

その3年後、創流70周年行事で訪日した際に宏家元にお会いし、さらに同年の10月には川名哲紀さんが、「ブラジリアでスタディグループを作りなさい」という宏家元のメッセージを伝えにブラジリアまで来てくれたのです。その言葉に背を押される形で、スタディグループを発足。さらに、草月創流90周年、スタディグループ発足20周年の節目であった昨年、ブラジリア内で支部設立を求める声が熱を帯びたのをきっかけに本部に働きかけ、「いけばなブラジリアクラブ」と「ブラジリアスタディグループ」を一つにまとめる形で、無事に支部に昇格することができたのです。

ジラさんの自宅で行われた月例会合にて。
A monthly meeting held at her home.

現在、ブラジリア支部には、7名の講師、約70名の生徒がいます。多くは仕事をリタイアなさった方ですが、公務員や医師、ジャーナリスト、心理学者、建築家、司書、美食家（！）といった専門職の方々も。また、主婦も多く、そのほとんどが在外公館の外交官夫人です。

支部ではほぼ毎月一回会合を開いて、本部からの連絡事項を伝え、ブラジルでのいけばなの関連行事について話し合います。また、「フェスティバル・ド・ジャポン（日本祭り）」への参加、9月は花展の開催、12月は会員が一同に集まってのホリデーセレブレーションというランチパーティーを開いたりと、年間企画も定期的に行っています。

ブラジル銀行文化センターで個展を開催（このイベントは9週間にわたって開催。まずはジラさんの個展から始まり、その後は生徒たちの作品を展示した）/ 2008
Held her solo exhibition at Centro Cultural Banco do Brasil (CCBB) 2008 (This event, lasted 9 weeks, the first of which was Zila's solo exhibition, followed by the work of her students in the following weeks).

ブラジルではもう一つ、サンパウロにも支部があり、私が草月を学び始めたころから盛んに交流をしています。より良くいけばなを学ぶために頻繁に意見交換をしたり、昨年9月に行われた展覧会では、サンパウロ支

部代表のエミコ・イデ先生を招待し、竹を用いた見事な作品を披露いただきました。

ブラジル人は概ね花が好きで、街には一般の方向けの花屋さんもたくさんあります。国内には大・小規模の花市場があり、多くの種類の花を調達することができます。ブラジリアの花の消費量は、サンパウロについで国内第2位。同じブラジル国内でも、南部と北部（アマゾン地域）や中部とでは植物の種類も全然違ってきますが、とりわけ蘭は全国民に好まれていると言ってもいいでしょう。最近は長持ちするという理由からアルストロメリアも人気です。

日本と同様に母の日（5月の第2日曜日）やバレンタインデーに似た恋人の日（6月12日）もあり、いずれも赤いばらを贈るのが慣習となっています。そして、クリスマスは定番の赤と緑の花材でアレンジメントを楽しみます。

ジラさんによるクリスマス花。熱帯の花材も使用。
Christmas ikebana arranged by her, using tropical materials.

いけばな用の花材の調達については、恵まれているのではないでしょうか。教室用に買い求めたものだけではなく、私の家の庭の花や木を使うこともしばしばです。いけばなに適した花を自分で植えることもあります。花器についても、陶器をはじめ、ガラス、レジン（合成樹脂）、アクリル等、種類が豊富です。

時には「重要なイベント用の花が届かない！」といった突発的な事態も起こりますが、こういった経験を通じて、解決方法を見出したり、困難を乗り越える術を身につけることができているのだと、前向きに捉えています。

熱帯花を使ったクラス。花材を直に摘んで。
Her class using tropical flowers. Picked up materials directly from garden.

ブラジルでも三大流派と目される草月

ブラジルでも草月は三本の指に入るいけばな流派として認知されています。展覧会を訪れる方は「本当に美しい！」と喜んでくださり、中には「作品を購入することはできないのですか？」と尋ねて来られる方もいらっしゃいます。

とはいえ、いけばなの知名度はまだまだで、一部の方を除いて、単に花を用いたアートとしか捉えていません。ブラジルは国土が広大なため、飛行機代が嵩んでしまうという障害はありますが、今後はインターネット等を活用して、ブラジリアとサンパウロ以外の国内の地域にも、草月を広めたいという展望があります。

私は草月の中に自分自身を見つけることができました。草月のいけばなは「常に新しく生まれ変わる」という意味を持つ、〝真のいけばな〟であると思っています。すなわち創流以来、偉大なる蒼風家元の精神のもと、移り変わる時代の生活様式に合わせて、草月そのものが変革を重ねてきたのです。発足したばかりのブラジリア支部ですが、今後も草月とともに、たゆまぬ変革を行いながら、前進していきたいと考えています。

草月

ジラ・ダ・コスタ・ハイムンド
Zilá da Costa Raymundo
（2級師範参与）
1985年に草月いけばなと運命的に出合いジゼラさんに師事。アシスタントを経て、1990年に師範証書を取得する。94年に「いけばなブラジリアクラブ」、97年に「ブラジリアスタディグループ」を発足。ブラジリア内での草月の活動を牽引し続ける。2007年、「創流80周年記念海外賞」を受賞。また昨年、ブラジルにおけるいけばなを通じた日本文化の普及・発展に寄与したとして、日本政府より「旭日双光章」を授与される。

kind of in[illegible]e that I built. Others I reimagined them by a[illegible] effects like reverb, stretched them, basically R[illegible] sounds of GG from the piano, turn it into new[illegible]d series of radio documentaries, one of which i[illegible]dea of North." He was fascinated with the ic[illegible]nd living in Canadian nature. Idea of norther[illegible]e're all attached to it, even though you haven't been there. It's kind of in you psyche, we are all Canadians. I put the music quickly for the show. Some of them are layers of previous idea.

K: When I listen to your music, like Red Tide, I can't help but feel that your music is tied to a very strong sense of place. Is there a particular place or season in Vancouver that has informed the way you work?

L: I am heavily influenced by place. Vancouver is interesting because it's not one scenery, we have the ocean, mountains and lots of rain, get gray washed dream state we enter in winter. Certain location around city I love because we have lots of natural beauty but also we have raw industrial cuts into natural beauty. There's odd cross pollination industrial meets beautiful nature which is very inspirational for me.

[Profile] Teshigahara Kiri

In 1974, she moved to Connecticut to finish her education. After graduating from the photography department of the School of Visual Arts in 1976, she embarked on her artistic career as fashion photographer for Ryuko Tsushin and High Fashion magazines in New York City. In 1978, she founded the influential New York punk band Eeldogs. In 1985, she became the director of the Sogetsu New York branch and has successfully operated the Sogetsu North America ever since. She is now based in both Japan and North America, focusing on curating and organizing art events and exhibitions.

To the Cities of the World (P.62)

Sogetsu Overseas Branches and Study Groups
In Brasilia

Walking together with Sogetsu on the path of untiring innovation

Last December another overseas branch debuted in Brasilia, the capital city of Brazil. Zilá da Costa Raymundo, the branch director, who has been leading Sogetsu in Brasilia ever since its early days, shares her story of the branch as well as her own activities.

Flowers blooming each season in the vast stretch of land

Most of us still have vivid memories of the 2016 Olympics held in Rio de Janeiro, Brazil. Its capital city of Brasilia is a preplanned city constructed on undeveloped land 58 years ago in 1960. As many as 3 million inhabitants live here in the capital out of the total population of 207 million.

Brazil belongs to a tropical zone with an annual average temperature of above 20℃ in most places though the climate varies by region in this vast land. Brasilia has rainy season and dry season in autumn and winter. In the driest season, humidity could go down to less than 17%. Even under such harsh climate condition, trees growing in the cerrado or savanna take turns in manifesting their beauty with colorful blossoms. Pink and purple blossoms are the first to arrive in June, followed by yellow in July and white in August. Since Brasilia is located atop the highlands called Planalto, the sky during the dry season is absolutely clear blue and we can enjoy the most beautiful sunset in Brazil.

Today I would like to share with you how Sogetsu developed in Brasilia and my encounter with ikebana.

I was born in a small city of Santa Cruz do Sul in Southern Brazil and moved to Brasilia after marriage. It was my mother who introduced me to the joy of decorating home-grown flowers in a vase. When we built our house in Brasilia, I tried to keep it small with minimal furniture so that we could have a large garden to fill our house with flowers.

I came to know ikebana about the middle of 1985 when I found an ikebana displayed at art exhibition. It was a beautiful arrangement of Anthurium with large green leaves that looked as if they were floating on water in a black suiban. I fell in love with ikebana at first sight.

It didn't take long before I signed up for Gisela sensei's class. At first, I only wanted to learn the method of fixing the flowers in the suiban just like in the work I saw at the art exhibition. When the teacher started off by drawing Kakei-zu on the blackboard to explain the angle and position of each flower, however, I was captivated by the depth of the art. I ended up in the library with a strong desire to study more, and the only book I found on ikebana happened to be "KASUMI'S IKEBANA FOR ALL SEASONS" written by Iemoto Kasumi.

After that I made frequent visits to the library and read books on Japanese culture and flowers. I was especially inspired by the books written by Iemoto Hiroshi, Takenaka Reiko and Stella Coe. After a year, I started to work as an assistant to the teacher in classes and creative activities.

In the years that followed, I came to walk on the path to become a teacher with the recommendation from Fujimoto Maria Etsuko sensei of the San Paulo Branch. My first tiny class of four students gradually grew larger and there was a time in the 2000s when I was teaching six classes in a week. Today I have downsized the classes teaching about 20 students twice a week.

I try to keep the classes small with eight to ten students so that I can design each lesson in such a way that they can find something new. Aside from technical explanations on Kakei-zu, for instance, I bring up the teachings of the Iemotos as well as topics related with Japanese art and culture to make the classes entertaining. After a tea break, they choose the materials and work on their arrangement. Once their work is completed, I go around to give a finishing touch. Students join my class for different reasons. Some were recommended by a friend and others attracted by an exhibition or the website, just to name a few. They come from different parts of the world not just Brazil. I have students from the Japanese Embassy, too. It's almost like a cross-cultural exchange.

Our growing desire to establish a branch

The lessons conducted in a friendly atmosphere helped the students to steadily improve their skills. In 1994 three teachers and students in Brasilia set up the Ikebana Brasilia Club. We worked together holding numerous events for the public including exhibitions and workshops, which attracted more members each year.

Three years later when I visited Japan to attend the 70th Sogetsu Anniversary celebration, I had the privilege of meeting Iemoto Hiroshi. In October of the same year, Kawana Tetsunori visited us in Brasilia with a message from Iemoto Hiroshi to set up a study group in Brasilia. So this was how the study group kicked off. And last year at the 90th Sogetsu Anniversary, which also marked the 20th year of our study group, we conveyed our growing desire to the Headquarters of establishing a branch in Brasilia. It is our great honor that the Ikebana Brasilia Club and Brasilia Study Group were promoted to form the Brasilia Branch.

Currently, the Brasilia Branch operates with seven teachers and nearly 70 students, mostly retirees. We have students who worked in specialized fields, such as medical doctors, scholars and architects. We also have many homemakers, most of whom are diplomat's wives.

Our branch holds a meeting almost every month to update news from Headquarters and talk about Ikebana-related events held in Brazil. Every year we take part in the Festival do Japão, hold a flower exhibition in September and a luncheon party named Holiday Celebrations for the members in December.

Brazil has another branch in Sao Paulo and ever since I started learning Sogetsu, we have been in close contact with them. Last year in September, we invited Ide Emiko sensei of the Sao Paulo Branch to demonstrate an amazing work using bamboo at our exhibition.

Brazilians, in general, love flowers and we can find a lot of florists in town. Brazil has flower markets of different sizes where we can find a large variety of flowers. Consumption of flowers in Brasilia ranks second after Sao Paulo. Although flora largely varies in the south, north (Amazon) and central regions, orchids are very special to Brazilians. Alstroemeria has also become popular these days because they last long. Just like in Japan, we celebrate Mother's Day (the second Sunday of May) and St. Valentine's Day (June 12) by sending a bouquet of red roses to our loved ones. At Christmas we enjoy making arrangements with the usual red and green materials.

We are truly blessed with the abundance of ikebana materials available here. I use not just purchased materials in class but flowers and branches from my garden as well. I even plant them for the purpose. Vases are also found in different types, such as ceramic, glass and acrylic among others.

When I look back, there were times when flowers for an important event did not arrive. Unforeseeable circumstances like these, however, provide us a good lesson to cope with difficulties. I always try to be positive.

Sogetsu, one of the top three ikebana schools in Brazil

Sogetsu is recognized as one of the three major ikebana schools in Brazil. People who visit our exhibition comment that ikebana is really beautiful and some even ask us if they could buy it. Nevertheless, publicity of ikebana is still low. Most people, except for a few, think that ikebana is simply an art using flowers. Though it is expensive to fly to different cities in a large country like Brazil, we hope to introduce Sogetsu to other regions besides Brasilia and Sao Paulo by making use of the Internet.

I was fortunate to find a place in Sogetsu where I can be myself. I believe in the authenticity of Sogetsu ikebana which advocates "constant rebirth." Under the banner of the great Iemoto Sofu, Sogetsu has continued to evolve to cater for the changing lifestyle ever since its foundation. Our newborn Brasilia Branch is determined to forge ahead on the path of innovation with Sogetsu.

[Profile] Zilá da Costa Raymundo

(Sogetsu School Teachers' Diploma 2nd Grade Sanyo)

After a fateful encounter with Sogetsu, Zilá started to take ikebana lessons from Gisela sensei. While working as her assistant, she acquired the teachers' diploma in 1990. With the start of the Ikebana Brasilia Club in '94 and the Brasilia Study Group in '97, Zilá has long been leading Sogetsu activities in Brasilia. In 2007 she attended the Sogetsu 80th anniversary celebration where she received the Sogetsu Award. And last year she was awarded The Order of the Rising Sun, Gold and Silver Rays by the Japanese government for her contribution to promoting and developing Japanese culture in Brazil through ikebana.

What is an ikebana work? Sofu's Lecture Notes 10 (P.68)

Ikebana has to be creative

Sofu's Lecture Notes are summaries of Sofu's saying that were passed on to his listeners and students through his lectures and Iemoto Workshops.

This time he talks about ikebana and creativeness to explore the essence of art.

With the exception of the subtitles that were added by the editorial department, the original text remains unrevised.